

# 市民的公共性の発露としての〈科学批判学〉

——『サイエンス・ウォーズ』からその先へ——

石川 洋行

研究室紀要 第43号 別刷

東京大学大学院教育学研究科 基礎教育学研究室

2017年7月

# 市民的公共性の発露としての〈科学批判学〉

——『サイエンス・ウォーズ』からその先へ——

石川 洋行

## 1. 『サイエンス・ウォーズ』の切り拓く問題圏

金森修『サイエンス・ウォーズ』（東京大学出版会、2000、以下Sと略記）をソーカル事件という世界的スキャンダルへの関心から紐解いた読者は多いだろう。ところが、本書において当該箇所の記述は意外にも薄く、その余波を受けたソーカル&ブリクモン『知的詐欺』（1997）に至っては「はるかに単純で単調な問題構制しかもたない」（S, 86）と一蹴しており、その仕事を金森が相手にしていないことも分かる。つまり、本書は論争の渦中に出版された重要文献でありながら、それを期して読むと肩透かしを喰らう論調で書かれているのである。何故このようなことになったのか。

そもそも、本書において金森は「ポストモダン哲学」の擁護者ではない。それは、「曖昧で銜いに満ちた議論の仕方」をするデリダに対する評価（S, 39）や、「スター学者」達の自然科学的概念の濫用に対し「弁解の余地はない」（同89）とする記述等からも明らかである。グロス&レヴィットの『高次の迷信』（1994）以来アメリカ科学論争の紹介に努めていた金森にとっては、ソーカルのポストモダニズム批判はその論争的価値において相対的に乏しいものであり、「現代科学論と科学との対決の輪郭が明確になり、両者の一層の切磋琢磨が起こるかに思えたサイエンス・ウォーズが、このソーカル事件のせいではないぶん矮小化された可能性が高い」（同94）と受け止められたのである。この意味において、『高次の迷信』からソーカル論文、そして『知的詐欺』までを包括的にとらえる金森の歴史評価は概ね妥当なものといえる。

だが一方で、金森も認める通りソーカル事件におけるパロディはそれ自体よくできたものであり、また『知的詐欺』においても、序章において想定される反批判を行うなど、論難や誤解を避けるための

科学者らしい周到さがみられることも確かである。この点、科学者の立場から誤用を列挙するソーカル&ブリクモンの戦略は一貫しており、それらはさながら濫用の博覧会のようなもので、多少なりとも科学に慣れ親しんだ読者からすれば、やはり眉を顰めるものがある。しかし、それを適切な解説なく論うのみでは、その後の発展的な議論も期待されえない。この意味でソーカルらの批判は、専門家-非専門家の対称性を不当に「濫用」しかねない危うさを孕みかねず、ポストモダニズムの知的影響力が（辛うじて）世界的権威を振るっており、かつ荒唐無稽な亜流を生み出していたという、時代限定的な文脈においてしかその正当的価値を持ちえないものである。

結果として、金森の立論と科学者の応酬は、決定的にすれ違っている。しかしそれは、両者の位相が異なるだけではないのか。繰り返すが、金森はグロス&レヴィット以来の科学論史を叙述することを重要な仕事としており、そこではソーカルによる「ポストモダニズム批判」は後景に退くことになる。金森は、近視眼的なポストモダニズム批判には目もくれず、彼一流の筆致において、「二つの文化」（C.P.スノウ）にみられる溝を論戦的アリーナで可視化しようとした、というのがとりいそぎ妥当な評価なのはなかろうか。

## 2. 〈経験としての科学〉を記述する：限界体験への沈潜

『サイエンス・ウォーズ』における金森の立論の特徴として、その独特な文体の問題を避けて通ることはできない。本書は、他の著作の多くと同様、時に冗長ともとられかねない彼一流の修飾や隠喩を駆使し書かれている（この点は『知的詐欺』と対比して顕著である）。

だが、これは「目くらまし」ではない。金森の特

微的な着眼点として、科学からみて「周辺の逸話的と思われていたものへの、より繊細な目配り」(S, 163)に自覚的である点があげられる。他著書の論題をみても、遺伝子改造、薬物や人体実験、原爆文学、そしてフーコー的生権力など、金森は一貫して、科学と人間が交差するその境面を記述することをその大きな使命としてきた。それはむしろ、科学が人間に与えるリスクや負の側面を自覚させる、気が滅入るほどに残酷な側面である。この面を照射することにより、金森はグロス&レヴィットなどに顕著の、イノセントな科学への盲信・楽観主義を批判的に相対化しようとしたのである。

これらの記述において、論理的思考と同等（かそれ以上）に必要なとされるのが、われわれの想像力である。ここで極めて興味深い文章たる「虚構に照射される生命倫理」（『知識の政治学』第8、以下PN）を引いてみよう。そこでは、「現実には地味で混在した因子が絡み合う物事でも、事実ではなく、想像や虚構がそこに加味されることによって、それらの問題性や特徴がより鮮やかに浮かび上がる」（PN, 166）として、科学と創造的虚構を架橋することを是とする世界観が強く提示される。つまり、金森は彼一流の人文知的想像力によって、〈客観知〉としての科学がその外部へと横溢し、時にそれ以上のものとしてあらわれる側面を、極限的な負の体験を含めて、可能な限り照射しようとしたのである。

金森の論調に遍くみられるのは、人文知に対する、またそれを下支えするわれわれの想像力に対する信頼である。かような立論のために、「虚構」の分離・排却を方法論的使命とする科学者とは、議論が噛み合うことはない。しかし、このような虚構を含む人間の想像力は、歴史的に形成された我々の共通感覚でもあることも、また確かなのである。このように考えると、金森がソーカル論文に対して「それが単なるパロディであり、そこでの字面は悪意を隠した仮面なのだ」と頭ではわかっている、私はある種の心の高ぶりを覚えてしまうのだ（S, 90）として、「人間一般の精神」に対する「ある種のいとおしさ」を感じるとした理由も理解できる。これは本書でも極めて意味の取りづらい箇所であるが、これも虚構＝パロディに対する「愛おしさ」の顕現とすれば理解可能なものになるだろう。かような議論を科学者は嫌がるかもしれない。しかし、それは科学者自身の方法論に依拠するものであり、虚構に対する文化的

まなざしを重要な議論的契機とする金森の問題設定は、そこから大きく離陸し、別個の地平を切り拓くのである。

### 3. 論争の彼岸：公共性の側へ

しかし、『サイエンス・ウォーズ』が切り拓く論争の亀裂を、単に属人的文体の問題に還元してはならない。他方で、金森の科学批判には遍く、科学の持つ政治性、そしてそれに対する科学者自身の無自覚さへの危機感が通奏低音として流れる。たとえば、グロス&レヴィットに見られる、科学的厳密さを隠れ蓑にして、科学技術の与える負性とその予防原則的観点等の論題に対し圧倒的無視を決め込む「むき出しの保守性への傾性」(S, 50)を金森が告発するとき、その〈科学の権力的機能〉に対する強い批判と危機感を肌で感じ取らざるを得ない。

このことは論争以後も、『エピステモロジー』や『知識の政治学』等における極めて政治的な発言に通底しているし、より直截的には3・11以後の放射能汚染に対する、少なくない科学者の日和見的・楽観的発言に対する憤怒に帰結するものだ。目に見えて環境汚染や化学物質のリスクが懸念される時宜において、科学者が「仮にそれが正しくても慌てふためいた処置はむしろ有害だ」(S, 51)、「正確な病因特定は「科学的に見て」極めて難しいものだ」(S, 52)などのたまうこと。これらは、権力が失敗を犯したときの稚拙な自己弁護の常套句ではなかったか。我々は、東大を筆頭とする科学研究者らが「三四学会会長声明」(PN, 304)に代表される日和見的で周到的な責任逃れを行い、そこでは「風評被害をなくす」という旗印のもと事故の政治的・科学的責任を、「無知な」市民に転嫁するという歪んだ科学主義を露呈したことを知っている。科学が強い政治性を付帯し機能する事実に関する金森の懸念が最悪の形で帰結するのを、われわれは目のあたりにしている。

振り返って、『サイエンス・ウォーズ』における科学批判、より正確に言えば科学と権力間の交差と結束に対する批判は、金森における十二分の「知的誠実さ」だった。ソーカル論争に熱中した科学者のうちどれほどが、原発事故後の科学的言語の「濫用」に対して自己批判たりえただろうか。その惨状を思い出すにつけて、私は暗澹たる気持ちにならざるを得ない。

もちろん、金森の記述に問題が無いわけではない。

(1)基本的に外国語文献の解題という形をとるために、その紹介に紙幅の多くを割かざるを得ず、論題の構造的連関が明らかにされづらい、(2)文体が流麗である一方、個人の感概を隠匿しない言述を行うため、記載事実とその評価の差異が曖昧化しやすい、(3)迂回や逡巡を含む独特の文体は誤解を招き易く、特に結論的明晰さを至上とする科学者との論争に適していない、(4)問題構制に対する一義的な断定や権力的言説との共振を回避する形で書かれてはいるが、その意識的構造化に乏しい（あるいは意図的に避ける）ためそれが読者に伝わりづらい、等の点である。しかしこれらの戦術的方法にもまして本質的な点として、(5)構造主義以降の哲学において科学が濫用されるに至った歴史的経緯を看過している点である。

確かに『知的詐欺』での詐術的濫用の数々を見れば眉を顰めざるを得ないが、一方でそれらを「科学者の猿真似」や「構造主義末期の最悪の行き過ぎ」（クリステヴァに対するソーカルの批判、『知的詐欺』邦訳53）とする見方は一面的であり、人文知の変革に対する知的実験だったことには変わりなく、金森は科学史家としてそう断言すべきだったのではなかろうか。かような構造主義の極めて時代特殊な社会科学性格を、ソーカルも、そして金森自身もが過小評価したがために、結局はパロディばかりが取り沙汰されて「知的警察」の越境的介入を許し、結果的には、ポストモダニズムのみならず退潮にあった哲学全体の潜勢力を失わせたのではないかと判じざるを得ない。

#### 4. 遺された課題

『サイエンス・ウォーズ』の立論は、ポストモダニズムの軽薄さをあしらいつつも、ソーカルに対してもそのワンパターンさを諷刺し、人文学の底広い射程や問題構制を擁護し、そこに科学（者）の政治性に対する批判的潜勢力を見出すという、きわめて複雑な論旨の上に成立している。これは一見、人文学者の権益保護のように映るかもしれないが、それは金森一流の議論的土俵への「誘い」にすぎない。だがそれとは別に、自身が科学史家でありながらなぜ科学が濫用されねばならなかったのかというすぐれた思想史的問いに答えていない、という問題は本書に

おいて本質的なものであると私は考える。

『知的詐欺』ではなぜか槍玉に上がっていないレヴィ=ストロース以来の構造主義は、「複雑なものを複雑なままに」（ピアジェ）抽出する方法論であり、しかもそれが文化や人間を対象とするものであるがゆえに、極めて人文・社会学的知に特化した方法論である。ゆえに、これを「似非科学」とする批判は、あまり正鵠を得るものではない。これらの知的実験に対し、金森は留保の評価しか与えていないが、すでに当該思想の退潮期に、その世界的な苛立ちと嘲笑の渦にあっては、ひとまずこの判断は正しかったと思う。しかし、このような奇妙な文体を生んだ思想的潮流はやはり一考する価値があり、そのより踏み込んだ評価に関しては、我々の手に残されたままである。

他方、より切迫したもう一つの論題、つまり科学の政治性に対する金森の直観は、少なくとも我が国では最悪の形で中し、社会的カストロフを見せることとなった。科学と政治が結託して進めてきた巨大技術のもたらした未曾有の複合災害に対し、まさに当の責任主体たる科学者集団は権力に対する醜態と脆弱性を露呈させる。かように批判精神を欠如した科学者の戯言に比べれば、権力の相対化を図る点においてラカン理論のほうが余程価値があると、私は考える。ソーカルによるポストモダニズム批判、金森による科学批判、双方が噛み合わないまま未消化に終わった感の否めないサイエンス・ウォーズであるが、今から見ればこのような論争が起こりうること自体、皮肉にも僥倖な時代だったように、私は思う。

論争以後、われわれに遺された課題としては(1)似非科学という批判に怯むことなく論題の社会科学的構造化を怠らないこと（説得力に欠けるとされた科学研究の多くが、似非科学として廃却されていく事実を忘れてはならない）、(2)構造主義以降の「科学の濫用」に対する思想史的回答を与えること。繰り返すがここで重要なのは、科学的概念の濫用に対する断罪ではなく、むしろその思想史的相対化である。そして、より科学論的な課題として、(3)科学においてあらたな規範を構築しうる批判的言説場を維持し、創造する努力を怠らないことである。かようにしてわれわれが科学を相対化するとき、未完の「サイエンス・ウォーズ」論は広範な知の体系と危機意識を伴って我々の目前に迫ることになるだろう。

しかし、当の金森自身は、このような過度に公共的性格（と心理的負荷）の強い思弁を一端脇に置いて、元来強くやりたいと言っていた思想や芸術に関する深い知を求めて、「冥府の海」（ボードレール『悪の華』第116「旅」）へと旅立ったようである。